

書評

佐々涼子著

『エンド・オブ・ライフ』

(集英社インターナショナル、2020年)

辻本 耐

人生の最期の段階を表すものとして、本書のタイトルにある「エンド・オブ・ライフ」という用語を最近、耳にするようになった。以前は、終末期（ターミナル期）という呼び方が一般的であったが、この用語はもともとがんの経過において、急速に心身の機能が低下する最期の時期を表したものであった。これに対して、特定の疾患や時期によらない幅広い人生の最終段階を表すものとして、エンド・オブ・ライフという用語が生みだされたのであろう。

著者の佐々木は京都にある診療所を訪れ、在宅医療に関わる医師や看護師とともに、自宅での介護や看病、看取りの現場を取材している。その内容は、まさに「エンド・オブ・ライフ」というタイトル通り、さまざまな疾患で人生の最終段階を迎えた患者たちとその家族の様子が描かれていた。例えば、子どもとの思い出作りのために潮干狩りやディズニーランドに出かける末期がんの母親たち、難病による全身の痛みに耐えかねて自ら命を絶った男性、認知症になった高齢の父親の世話で途方に暮れる息子、などである。また、著者の母親も難病を患っており、父親が在宅で献身的に母親の介護を行い、看取っていく姿が紹介されていた。そして、著者は取材を続けるうちに、診療所で出会った男性看護師の森山が末期がんであるという事実と直面する。

本書は、二〇一八年に末期がんを宣告された森山とのやりとりを軸として、著者がそれまでに取材してきた患者とその家族、そして著者の両親の様子を回想しながら進んでいく。こういった構成は、これまで200人の患者を看取ってきた看取りのプロである森山ならば、過去のエピソードを参考にして、きっと理想的な最期の過ごし方を見いだすだろうと期待しているかのようなようであった。そして、彼が選んだ最期の過ごし方は、著者も驚くほどシンプルなものだった。それは、好きな人と

一緒に好きな場所に出かけて、好きなものを食べて、遊び暮らすという過ごし方であった。

この本を読み終えた者ならば、自分はどのように死んでいくのかと想像し、森山のような人生の幕引きをしたいと思ったに違いない。しかし、死が現前化しつつある中で死の恐怖と戦いながら、それでも治療をやめて、悔いがないように今を楽しむという選択は並大抵の覚悟ではできるはずがない。誰もがそうありたいと願う幕引ではあるが、看取りのプロである森山だからこそできた人生最期の過ごし方なのだ。それでは、もしも余命宣告をされたならば、私はどのような最期を望むのだろうか。私は小心者なので、森山の真似なんて到底できないと思っている。一部の望みを託して厳しい治療を受けるかもしれないし、「死にたくない」と泣きわめいて大騒ぎするかもしれない。おそらく、素直に死を受け入れるようなことはないだろう。

結局のところ、森山や診療所の医師が言うように、人間は生きてきたようにしか死ねないのである。理想的な死に方なんて最初からどこにも存在しないのかもしれない。そうであるならば、病院か自宅かといった死に場所や、残された時間の過ごし方、死を受け入れたかどうかなどといったことは大した問題ではないのだ。だからこそ、本書はさまざまなエピソードを紹介しながら、どのような死に方であれ、その人が迎えた死に方を周囲が尊重すること、そして、家族、友人、医療スタッフといった誰かとのつながりの中で死んでいくこと、つまり、人と人とのコミュニケーションこそがよりよいエンド・オブ・ライフへの第一歩であるということを見せてくれているのだと思う。